



ベッドタイム ・トーク

12月17日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

12月17日のおはなし「ベッドタイム・トーク」

私の彼はすっごく教養がある。教養溢れている。どのくらい教養が溢れているかというと、一緒にいると彼の教養に溺れてしまいそうなくらいだ。「わかってんのか？ イラクで何が起きているか」なんて話し始めると止まらなくなる。だから私はてっきり彼がイラクに住んでいたことがあるのだと思いこんでいた。あ。もちろん、最初の頃だけだけだね。

それから環境問題はいまだというステージにあるのか、なんて話が始まることもある。環境問題がステージになっているなんて知らなかったの、「それ面白いの？」と聞くと、理由はわからないけど滅茶苦茶怒られた。「面白いとか面白くないとかで判断するな！」って。でもだったらわたしはそんなステージは見に行かなくていいや、と思う。

映画の話とか始めるともう本当に一晩中でもしゃべっている。でも私の知っている映画の話は一つも出てこないの、わたしは眠くなってしまう。彼は映画を見ると必ず世界中の誰も気がついていない大発見をしているらしいんだけど、彼の他には誰も見ていないだけなんじゃないかと思うことも、ちょっとある。だって、本当に聞いたことないような人とか、国とかの名前ばかりでてくるんだもん。

時には子どももいないのに教育問題の話を始めたりする。だから本当はどこかに隠し子がいるんじゃないかと不安になる。「おめえさ、安倍はダメだよ。あれは看板だけで中身がないからよ」なんて言い始めて、やれどこの本にこう書いてあるがそれは誰のパクリだの、フクトウ問題を見りゃ化けの皮がはがれてるのに誰も気がつかねえ、なんてまくしたてることもある。

そんなとき私は中学受験からやり直したいと思う。そしてそう口にする。

「あーあ。中学受験からやり直したいよ」

すると彼が言う。

「中学受験の何を知ってるんだよ、おまえが」

なるほど私は中学受験の何も知らない。何も知らないし、知りたいとも思わない、本当のところは。彼は私の乳首をいじくり回しながら講釈を垂れる。

「中学受験なんてさ、クズだぜクズ。クズ製造システムだ。おれみたいに生まれつきペーパーテストに向いた一握りのエリートを別にすれば、ほとんどのガキがスポイルされる。教わったことしかできないし、自分で頭を使う習慣が失われる。押しつけられてしか勉強できないから、進んで何かの計画を立てることもできなくなる」そこまで言うと彼は私の左の乳首を口に含み、あまがみしたり舌先で転がしたりして、それからまた話し始める。「自分で自分に自信が持てないんだな、あいつらは。他人の評価でしか判断できなくなる。自分からああしたい、こうしたいという意志が失われる。要するにダメ人間を大量生産するのが中学受験なんだ」

乳首をつまんだり押ししたり胸をつかんだりもんだり離したりしながら、どうしてそんな面倒な話ができるのか、私にはさっぱりわからない。そういうのが、中学受験をした人とそうでない人の差なんだろうか。だからそのことを言ってみる。

「でもさ、そういうの、すごいと思う」息が弾まないように気をつけながら、私は話に参加する。「エッチ、しながら、そんな、話が、で、できるのって、やっぱ、一度に、いろんなこと、た、たくさん、考えたり、思い、思いついたりする、トレーニング、う、受けてるからなんじゃない？」

すると彼は手を止めて、こわい顔で私を見て「バカにしてんのかよ」と怒鳴る。私は怖いのでバカになんかしてない、ほんとうにすごいと思っていると呟く。すると彼は怒った顔でいきなり入ってくる。とても痛いけど、ものすごく乱暴にされるとだんだん気が遠くなって、気持ちいいのかもしれないと思ってしまう。彼が激しく動きながらほんとうにすごいっていうのはどういうことかわからせてやると言う。すごいだろうすごいだろうと腰を振る。私は何もわからなくなっ

ていくのに、うんうんとうなずく。

やがて彼が私の中でビクビクさせながら終わって、全身の力が抜けるので、わたしは彼の身体にしがみついて、両脚で引き寄せて、何もかも吸い取ろうとする。そして思う。精液と一緒に教養も流れ込んできてくれたらいいのになあ、と。それから考えるんだ。中学受験からやり直したいって。教養の時は口で受けとめた方がいいのかな。

(「中学受験」 ordered by こあ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project (以下SFP) 作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする (Twitter)」「いいね! (Facebook)」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ!」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して.....って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート (RT)、「いいね!」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね!」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募!お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ! はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

ベッドタイム・トーク

<http://p.booklog.jp/book/40923>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40923>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40923>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.